

湿原と人との意外な関係をひも解く [『湿原力：神秘の大地とその未来』辻井達一著]

高田, 雅之 / TAKADA, Masayuki

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

50

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2013-06

【読書案内 — 環境を学ぶために —】

湿原と人との意外な関係をひも解く

高田 雅之

『湿原力：神秘の大地とその未来』（辻井達一著／北海道新聞社）2013年

Google Earthで世界の陸地を大きく眺めて見てください。陸地の色は一樣ではありません。濃い緑色は森林です。東南アジアやアマゾンには濃い緑が多く見られます。薄い緑色は草原で、白っぽいのは乾燥地（砂漠）です。意外と白っぽいところが多いのに気付くと思います。この3つは地球の陸地を構成している主要な生態系で、大ざっぱに見てそれぞれ陸地の約3分の1ずつを占めています。

そしてここにもうひとつ、宇宙からは見えにくいですが、地球の言わば循環器系の役目を果たす、大切な生態系があります。ある時は大きな生態系を横につなげ、ある時は海岸線に沿って点在し、またある時は星屑のように要所に散りばめられています。それがこの本のテーマとなっている湿地／湿原です。水辺と言い換えてもいいかもしれません。川だったり湖だったり、干潟、泥炭地、沼地、湿った草原などが含まれます。線や点の形をしているものが多いので、Google Earthでは見えにくいですが、陸地の面積の約1割前後を占めているとも言われます。ところで「湿地」と「湿原」の違いですが、水面が多く見えているところが「湿地」で、植物が多く見えているところが「湿原」と言っているでしょう。本書では大きく「湿原」という言葉でくくっているように、この二つの言葉の使い分けに気を遣う必要はさほどありません。

自然界における湿原の役割には、他の生態系にはない固有で、しかも非常に

重要なものがあります。本書では「もし湿原がなくなったらどうなるか（第一章）」という問いかけをしながら、水がめとしての機能、水量や水質の調節、炭素の蓄積、貴重な生物の生息環境、といった生態系の役割をわかりやすく解説しています。

しかし本書のねらいは、湿原を自然科学的に解説するものではありません。我々にとって一見馴染みのない、しかもつかみどころのない湿原という生態系が、実は人間と深い関係にあることを、歴史や文化や様々な出来事をひも解いて語っているのが本書です。それも湿原研究の世界的権威とは思えないほど平易に、楽しそうにつぶやいているから驚きです。

読み進む中で、私たちが知らず知らずに湿原から様々な恩恵を受けていることが明かされていきます。「えっこれも」「何だあれもそうなんだ」という具合に、湿原という生態系がもたらす御利益を知るほどに、湿原が身近な存在に思えてくるのではないのでしょうか。このように生態系から人間にもたらされる様々な形の恩恵を総称して「生態系サービス」と呼んでいます。聞きなれない言葉かもしれませんが、今や人と自然の関係を考える国際的なキーワードになりつつあります。なぜ自然を大切にしなければならないか、なぜ生物多様性を守る必要があるのか、という問いに対する答えのひとつでもあるのが「生態系サービス」というわけです。

本書では、湿原が人にもたらす「生態系サービス」について随所に紹介されていますが、不思議なことに「生態系サービス」という言葉は、本書には一度も登場しません。最近広まったばかりの言葉なので、馴染みにくいと考えたからなのか、あるいは言葉ではなく具体的な話をとおして実感として捉えてもらおうという意図があるのかもしれません。

その代わりに、本書ではしばしば「ワイズユース（賢明な利用）」という言葉が登場します。その意味は「持続可能な開発」とほぼ同じです。言ってみれば、“湿地を守ることで経済的にまたは生活上利用し続けることができる”というものです。「持続可能な開発」が1980年代後半以降、国際的によく使われ始めたのに対して、「ワイズユース」は1970年代はじめから、ラムサール条約という湿地を保全する国際条約の中心的理念として、既に使用されていたことは優れた先見性といえます。

ではどんなものが湿原のワイズユースになるのでしょうか。本書では持続的な漁業と水田がその最たるものとしてあげられています。そうです、湿原のワ

イズユースは私たちの身近なところにたくさん存在しているのです。“湿地の恵み”といってもいいでしょう。北海道では道東の厚岸湖のカキ養殖や、尾岱沼（野付湾）の打瀬舟によるホッカイシマエビ漁がワイズユースの例として紹介されています。各地に残る伝統的な漁法は、根こそぎ資源を獲るのではなく、人と生き物の知恵比べとも言える駆け引きのようなもので、こういったものがワイズユースと言えます。そして琵琶湖特産のニゴロブナも、高級食材のキャビアも湿地の恵みというわけです。

水田について本書では、アジアにおいて湿地を最も効率のよい食料生産の場に転換した、ワイズユースの最たるものとしています。その際の条件は、“かつてのような生き物の豊かな水田”といえると思いますが。何とんでもイネはもともと湿地の植物であり、日本の地名や人名に使われる「神田」「深田」「車田」なども、その由来は水田と深い関わりがあります。

そして本書の第二章以降では、人と湿原との関係にまつわる様々な話が紹介されています。ヨーロッパの湿原では500年近く前に忽然と消えた軍の一隊が掘り出されてその謎が解けたり、ミステリアスなものとしては、湿原から生々しい遺体が出てきて、殺人事件かと調べたところ2000年も前の人（ボググピールという）だったり、シベリアでは沼地を使ってマンモスを仕留めたり、などなど。

またスコッチウイスキーの香りと味わいは湿原の泥炭によるものだし、作物栽培や園芸に使われるピートモスも湿原で採取されたものです。さらに著者が「日本の古代史は湿原にまつわる故事で満ち満ちている」と語っているとおり、「古事記」や「日本書紀」には湿原を題材にした記述が多く、いかに日本の平地には湿地や湿原が多かったかが読み取れます。実際東京、大阪、名古屋をはじめ、日本の主要都市のほとんどは湿地や湿原に築かれたものといつてよいでしょう。

さらに題材には事欠かないほどに話は広がります。河童に代表される伝承、ヨシの利用、食文化、祭りや芸能といった伝統文化、絵画と音楽……。中でも文学と湿原について熱く語られているのは、舞台としての湿原というより、人知を包み込む自然の奥深さの象徴として湿原が語られているように感じられます。

このように私たちと関係の深い湿原の保全について、本書にはこんなエピソードが紹介されています。「(北海道東部の)霧多布湿原では当初、地元の漁協

がラムサール登録を拒んだが、湿原から海に流入する有機鉄イオンが昆布の生育に適した環境をつくるのだ、ということを専門家に説明してもらい、逆にきわめて協力的になったこともあった」。つまり、科学だけで湿原は守れない、科学が人を動かし、人が湿原を守るといことです。科学も政策も教育も人を動かすツールということでしょうか。理屈だけではなく、発想や眼差しを変えることも大切だということだと思います。水質が悪化し漁獲量が減ったインドのチリカ湖に著者が訪れ、ちょっとしたアイデアで劇的に問題を解決し、この湿地を再生したエピソードが紹介されています。まさに「湿原力」のなせる技でしょう。はてどんなアイデアだったのか、それは読んでのお楽しみとしましょう。